

邦題：「あるべかりし西田哲学」——田辺元初期の課題

(英題：What Nishida Philosophy Should Be: Tanabe Hajime's Challenges in his Early Works)

浦井 聡 (Satoshi Urai)

(日本学術振興会特別研究員 PD (北海道大学))

田辺元は 1922 年からの渡欧の船上で「西田哲学を論理的に精密にすることが自分の分である」と語ったと伝えられている。田辺に限らず、西田のテキストを読んだことがある者は西田の論証の大胆さに驚いた経験を持つのではないだろうか。田辺はこの部分を自分が補うことで、西田哲学を哲学として精密化することを自身の為すべき仕事として見出したのである。実際、特に 1926 年までの田辺はこの言葉の通り、純粹経験から絶対自由意志、そして場所に至る西田の思索のあとを追うように、これらを想起させる概念と西田と共通の道具立て (リッケルト・ベルクソン・コーヘン・フィヒテなど) を用いて自身の哲学的立場を彫琢していった。この関係は言うまでもなく、1930 年の「西田先生の教を仰ぐ」を境に徐々に変質していく。

本発表は、この有名な論考の中で田辺が「私は先生の従前より同情を有せられたフィヒテの意志的観念論に近い思想が、今日の場所的自覚の立場を裏切って居はしないかを疑わざるを得ない」と言っていることに注目する。田辺は『自覚に於ける直観と反省』を「日本における独創的組織哲学の名著」と高く評価しているが、西田自身が「刀折れ矢竭きて降を神秘の軍門に請うたという謗を免れないかも知れない」と表現した本書の立場を、1926 年までの田辺は哲学として完遂させようとしていた。そして、その方向が西田の場所の論理と相容れないことが 1930 年の時点で露わとなったのである。別の角度から言えば、田辺が『カントの目的論』(1924 年)で「当にあるべかりしカント」を描くと言っているのと同じように、「西田哲学の論理的精密化」という「あるべかりし西田哲学」を構築する過程で、田辺は西田本人と衝突することになったのである。

では、田辺が構築を試みた「あるべかりし西田哲学」とは何だったのか。本発表は田辺の初めての未完論考「直観知と物自体」(1925-26 年)に至る田辺の思索を紐解くことでこれを解明することを試みる。